

フラナリー・オコナーの “Good Country People”と “A Good Man Is Hard to Find”における 会話についての考察

久保尚美

はじめに

エッセイ集『秘義と習俗 (*Mystery and Manners*)』のなかで Flannery O'Connor は、小説の務めは小説家が自分のまわりの生活から取り出す「習俗」を通して、「秘義ミステリーを具体的に表す」(MM 124) ことだと述べている。そしてアメリカ南部にはそうした「習俗が濃密に」あり、それが南部作家にとって有利な点であるとし、またその豊かな「習俗」がとりわけ色濃く表れるのが南部の人々の「会話」においてであるという (MM 103)。(1) オコナーによれば、「南部作家が南部の土地と もっとも深く結びつくのは耳を通して」であり、「南部人の登場人物が話すとき、彼の社会的地位がなんであるかに関わらず、そこに南部社会全体の響きが聞き取れる」(MM 199) のである。従って作品に描かれる会話は、オコナーの耳を通して得られた南部の「習俗」が、登場人物の声となって表れたものであり、その一つ一つがオコナーの示そうとする、現実の表面を突き抜けたところにある「秘義」と究極的には結びついているはずだといえるだろう。

オコナーの作品に数多く描かれる会話の中でもとりわけ特徴的なのは、「完全なものはない (“Nothing is perfect”）」(CS 272)、「人はみなそれぞれだ (“Everybody is different”）」(CS 273)、「微笑みは誰も傷つけない (“a smile never hurt anyone”）」(CS 276) といった決まり文句が

発話の大部分を占める登場人物たちによるやりとりだろう。このような言い回しがふんだんに用いられる会話は、往々にしてアイロニカルでありながらもユーモラスであり、こうした会話の面白さはオコナーが自作をコミック小説と呼ぶ所以でもあるだろう。しかし、紋切り型の表現を使った会話は作品のコミカルな側面を際立たせるためだけのものではない。会話表現の硬直はそのまま、登場人物の思考の硬直を示すものでもあるだろう。本稿では、オコナーの短編作品のうちでも、特に紋切り型の会話が重要な役割を果たしていると思われる“Good Country People”と“A Good Man Is Hard to Find”を取り上げ、各々の作品において紋切り型の表現が用いられるコンテキストをたどりながら、それが登場人物の思考とどのように結びついているかを考察する。そして紋切り型の表現が機能しなくなる瞬間に注目し、そのとき登場人物の硬直した思考に亀裂が入り、それによりその人物が何かしらの神秘の次元の出来事に触れている可能性があることを示したい。

1. 紋切り型の応酬－“Good Country People”

オコナーの作品には紋切り型の表現を多用する登場人物が頻繁に描かれるが、そうした表現は、登場人物たちが物事を見る際の都合の良いフィルターとなり自分の見たくないものを包み隠すヴェールとなっていることが多い。例えば「善良な田舎もの」(“Good Country People”)に登場する聖書売りを騙る青年と、彼が訪ねる家の女主人 Mrs. Hopewell とのやりとりは、その顕著な例である。Manly Pointer と名乗るその青年がホープウェル夫人に対して、「ぼくのような田舎もの (“country people like me”) とは、話をするのもお嫌なのでしょうね」(CS 278) と卑下するような言葉を口にするると、すぐさま夫人は、いつも好んで口にする決まり文句や警句を並べ立てる。『まあ』『善良な田舎の人たち (“good country people”) というのは地の塩です！⁽²⁾それに、人それぞれやり方は違うものよ。世の中を動かすにはあらゆる種類の人々が必要でしょ。それが人生なのよ！』(CS 279)。しかし実はその直前のやりとりで青

年から、『あなたは善良な方 (“you’re a good woman”) だと存じております。友人たちがそう言っていましたから』と言われたときには、夫人は「まぬけ (“a fool”) だと思われるのは真っ平ごめんだ」と思い、『何を売ってるのかしら?』と冷淡に切り返しているのである (CS 278)。ここからも窺い知れるように、“good” という言葉は夫人にとって必ずしも単純な褒め言葉ではなく、むしろ相手をお人好しで御しやすいと見下した表現なのである。そんな夫人が青年を指して “good country people” と言うときも同様であろう。

この “good” という口当たりの良い言葉は、夫人の真意を糖衣のように包み込み、おそらくは夫人自身も自らのあからさまな感情を認識しないままに気分良く発せられるのだが、実際には青年を “good country people” のひとりだとカテゴライズすることによって、青年を自分より劣る存在と位置づけ、自らの優位性を確立あるいは再確認しているのである。同様に、使用人の Freeman 夫妻を長く雇っているのも「彼らが屑 (“trash”) ではなく、善良な田舎の人たち」(CS 272) だからである。その一方で自分の娘 Hulga (Joy) が大学で哲学の博士号を取るという夫人にとっては「普通」とは考えられない事実に関しては「全く困り果ててしまい (“at a complete loss”）」、さらに片足に義足を付け、心臓に病を患う娘が「三十歳を過ぎた、がっしりした体つきの女で、これまでダンスをしたことも、正常な良いとき (“any normal good times”) を過ごしたこともない」ことをどうしても認めることができない。そこで、自分の常識にあてはまらない娘を、子供じみた服装をしていることから、あの子は「まだ子供なんだ」(CS 274) とカテゴライズすることで直面したくないさまざまな事実から目を逸らしている。

そしてホープウェル夫人の娘で、作品の最後で青年に義足を奪われることになるハルガは、そんな母親を馬鹿にしているのだが、彼女もまた別の形の紋切り型で世界を認識していることが、その言葉遣いから明らかになる。Fred R. Thiemann が的確に指摘するように、「もしホープウェル夫人が俗世間の表現から外れる言葉づかいや思考ができないとすれば、

それと同様にその娘は、マルティン・ハイデッガーのようなニヒリストの書物から外れた言葉づかいや思考ができない」（48）のである。ホープウェル夫人の好きな決まり文句は「完全なものは何もない」や「それが人生というもののだ！」や「人それぞれに自分の考えがある」といったもので、夫人はそれらを「たいていは食事中に」に口にするが（CS 27 2-3）、ハルガもまた「食事中にいきなり」席を立ち、『女よ！おまえは内側を見たことがあるか？おまえは内側を見て、己とは異なるものを見たことはあるか？神よ！』や『マルブランシュは正しかった。つまり我々は自らが自らの光ではない。我々は自らが自らの光ではないのだ！』と叫ぶのである（CS 276）。そして母親が彼女から目を逸らすように、ハルガも母親から目を逸らす。ハルガは、母親とフリーマン夫人によって交わされる紋切り型のやりとりに対して「そこから少し外れたところを見つめ、まるで意志の力で盲目になり、盲目のままできようとしているような」態度を示す（CS 273）。聖書売りの青年に対する認識も母親と同様で、青年を御しやすい無垢な相手だと見なしている。無神論者であることを自認するハルガは、「真の天才は劣った人間にも思想を分らせることができる」（CS 284）ことの証として、「聖書売り」の青年を誘惑し墮落させ後悔させた上で、そのような後悔が無神論の観点からは無駄であることを教えようと思いつくのだ。

ティーマンはそのようなホープウェル夫人とハルガの言動を、「現実を死んだシニフィエのなかで凍らせることによって飼いつくそうとするように、そうした言語のなかに人々を位置づけることによって人々を支配しよう」という「傲慢の罪」であると結論づける（49）。確かにティーマンの指摘する通り、紋切り型の言葉づかいは、そのまま紋切り型の思考につながっていると考えられる。それをを用いることはつまり、視界に入るものを予め定まっている、往々にして自分にとって都合の良い物語にはめ込むことであり、理解という名のもとにその対象を支配することを意味する。そしてその効用のひとつは、ひとたび目に映る人物や事象をそうした表現で切り取ってしまえば、全てを理解することができ、そ

れ以上のことを考えずに済むところである。だがさらに、オコナーの作品の登場人物の多くが、しばしば独善的あるいは唯我論的であると指摘されるように、⁽³⁾ 紋切り型を多用し、全てを既知の物事に変換する登場人物の思考のうちに、自らの理解を超越する〈他者〉が存在し得ないことに、より根深い問題が含まれているのではないだろうか。自らの「生の意味」を「キリストによる罪のあがない」にあるとする (MM 32) オコナーにとって、小説の主題も常にそこにある。だとすれば、〈絶対的な他者〉としての神の問題が、作品に描かれる〈他者〉の不在という問題の先にあると考えてもよいのではないだろうか。何もかもを理解可能な形に切り取ってくれる紋切り型のフィルターを通すことで、全てが自己に帰着する認識においては、理解できないものは存在しない。つまり、理解できない「神秘」の次元の入り込む余地もないのである。

従って短編“Greenleaf”の主人公 Mrs. May を唯我論的であると論ずる批評に関して Jane Marston が、そうした批評は「もし人が自己の外側の世界を知ることができないのなら、どのように神の恩寵を経験していると確信できるのだろうか」という「認識論的な問題」(375)を孕んでいる点を見落としている、と指摘するのは尤もであるだろう。登場人物たちの自我の砦が堅牢なことは確かであり、そして恩寵の受け入れがたさという点においては、読者もまた同様なのである。オコナーはそのことにも非常に意識的だった。自分が作品に描こうとする神の「恩寵の働き」が「ほとんど悪魔に支配された領土での恩寵の働き」(MM 118)であり、「恩寵が自然から切り離されたり、あるいは、恩寵の可能性そのものが否定されている場合、それのはたらきを示すことはできない。なぜなら、だれもあなた(作家)の意図をほんの少しも分からないからである」(MM 166)と述べていることからそれは明らかであるだろう。オコナーが作品に繰り返し描くのは、登場人物たちの意識をとりまく壁に僅かな亀裂が入り、それが揺らぐという希有な瞬間なのである。いくら砦が堅固であれ、それを揺るがさない限り、オコナーの信じる「秘義」の次元、神秘の次元の出来事を作品に示すことはできない。

オコナーの作品に暴力が多いのはそのためだ。作品に暴力を描くことについてオコナーは、「登場人物を真実に引き戻し、恩寵の瞬間を受け入れる準備をさせる」(MM 112) ために他に方法がないからだ、と述べる。

そのような準備のための瞬間は、「善良な田舎もの」においては、ハルガの義足が奪われそうになったときに訪れ、それはやはりハルガの言葉に表れる。青年に対して『あんた、善良な田舎ものじゃないの？ (“aren't you just good country people?”)』と「ほとんど嘆願するような声で」(CS 290) 呟くときにハルガの受けた衝撃は、自らが築いてきた信念の体系を揺るがされる衝撃である。まず青年に対する驚きの言葉は、見下していたはずの母親と同じ「善良な田舎もの」という紋切り型を通して自分も青年を見ていたことをハルガに突きつける。そして同時にハルガこそ、青年がハルガを良い気分にさせ油断させようと連発した『君は他の人とは違う』(288) といった安易な紋切り型のお世辞にすっかり騙された「善良な」お人好しであることを知らされる。そしてさらに、自分よりも「劣った人間」であり、自らの無神論を説くには恰好の相手であるはずの「聖書売り」の青年が、『おれは生まれたときから、なにも信じてなんかいないんだ!』という捨て台詞を残し、彼女の義足を奪って逃げ去るとき、ハルガがそれまで頼りにしてきた信念の体系は象徴的に奪い取られることになる。少し長い引用になるが、義足の持つ象徴性は次の箇所を示されている。ハルガが青年に『木の足がくっついているところを見せて』(CS 288) と言われる場面である。

彼女は鋭く小声で叫び、顔からさっと血の気が失せた。その要求の猥らさが彼女にショックを与えたのではなかった。子供の頃、彼女はときとして屈辱感に苛まれることもあったが、教育がその最後の痕跡にいたるまで取り除いてくれていたのだ。まるで名医が癌を掻き取るようにだ。彼女が彼の要求に屈辱を感じないのは、彼女が彼の聖書を信じないのと同じだった。しかし彼女は孔雀がその尾を気にするように、義足のことを気にかけていた。彼女以

外の誰にも触れさせたことはなかった。まるで誰かほかの人が自分の魂を大切にするように、彼女は義足を大切にし、誰も見ていないところで、ほとんど自分の目をすら逸らしながら扱うのだった。(CS 288)

この引用でまず明らかにされるのは、「義足に対する屈辱を削り取ること」と「聖書への信仰を否定すること」がハルガにおいてはパラレルであり、それらが共に「教育」によってなされたということである。「義足に対する屈辱」が「聖書の否定」とパラレルであるとすれば、秘かに、「自分の目をすら逸らしながら」義足を気にし続けるハルガは、『私は神を信じてもないのよ』(CS 285)と言いながらも、やはり神の問題を気にしているといえるだろう。それは『おれは生まれたときから、なにも信じてなんかいないさ!』と苦もなく言い切れる青年と比べると、いっそう明白になる。サルトルは『実存主義とは何か』において、実存主義と無神論の違いを説明する際に、「実存主義は、神が存在しないことを力のかぎり証明しようとするという意味で無神論のではなく、むしろ、たとえ神が存在しても何の変わりもないと明言する」という観点に立つとし、また「神が存在すると信じているのではなく、神の存在の問題が問題ではないと考えるのである」(76)と述べているが、この作品においては、青年の言葉が「神の問題が問題でない」という態度を示しているのに対して、その「問題」に「教育」というヴェールをかぶせることで砦を築いてきたハルガのふるまいは、「神が存在しないことを力のかぎり証明しよう」というものだったと言えるだろう。そしてその象徴でもあった義足を奪われることによって、自らにとって「神の問題が問題ではな」かったことは一度もなく、実際にはそこから目を逸らす術を蓄えてきただけだったという事実に向直したのではないだろうか。

「善良な田舎もの」では全ての登場人物が紋切り型で話す。⁽⁴⁾ ホープウェル夫人とハルガだけでなく使用人のフリーマン夫人も、ホープウェル夫人が決まり文句をひとつ言うたびに、自分の方がその決まり文句の意味をよく知っているのだという態度を取る。例えば、ホープウェル夫

人が『人はそれぞれ違うものよ』と言えば、『たいていの人はそうですね』と答え、『世の中を動かすにはあらゆる種類の人が必要なのよ』と言えば、『私はいつもそう言ってますよ』(CS 273) と言うのである。そもそもホープウェル夫人もフリーマン夫人もハルガも、それぞれが紋切り型を使って自らの優位性を示そうという覇権争いを行っているのだが、そこへ聖書売りを騙る青年が参戦したのである。だがホープウェル夫人やハルガが、紋切り型のなかに安住しそれを疑ってはいないのに対して、聖書売りの青年は、その空疎さを当然のように理解し、それを操り、白々しく「善良な田舎もの」を演じながら二人を出し抜くのである。そして当初からの目的であった義足を手に入れると、自分が「善良な田舎もの」ではないことを明かし、マンリー・ポインターという名前さえも偽名であったことを知らせ、ハルガにとって正体不明の、理解を超えた存在となる。ハルガの呟く『あんた、善良な田舎ものじゃないの?』は、ハルガが自らの紋切り型を疑う、信念の揺らぎの瞬間の言葉であると考えられる。

2. 紋切り型を持つものと持たないものの衝突－“A Good Man Is Hard to Find”

「善良な田舎もの」でも見られたように、オコナーの作品の中に描かれる会話は、すれ違い、無視されるか、まったく入れ替え可能なくらい表面的なやりとりかのいずれかである場合がほとんどで、そこにはいわゆる対話というものは見られない。こうした会話は、自己満足の発露であるか、自分の紋切り型に対象を取めるための確認の行為のようなものにすぎない。しかし、目の前に紋切り型にあてはまらないものが現れたとき紋切り型は破綻をきたす。次に、全短編の中でほとんど唯一の紋切り型を持たない登場人物 The Misfit が描かれる「善人はなかなかいない」(“A Good Man Is Hard to Find”) において、会話がどのような役割を果たしているかを考察する。

「善人はなかなかいない」においても、ミスフィットが登場する作品

の中盤までは、紋切り型に満ちたやりとりが展開される。例えば、家族に対する祖母 (the grandmother) の発言は繰り返し無視される。まず冒頭のページでは、祖母が息子のベイリー (Bailey) に『ねえ、ベイリー、ちょっとここを読んでみて』(CS 117) と、犯罪者が脱獄したという新聞記事を指して話しかけるが、ベイリーは「自分が読んでいるもの (スポーツ欄) から目を上げない」(CS 117)。さらに息子の妻にも話しかけるが、「聞いていない様子」(CS 118) である。旅行に出かける車中では、その様子はさらに明らかになる。祖母は『暑くも寒くもない、ドライブ日よりだね』から始まり次々と「こまごまとした景色の面白さ」を話し続けるが、その段落の最後には「子供たちは漫画を読み、母親はとっくに眠りこけていた」ことが示される (CS 119)。この他にも祖母の言葉が無視され、家族が全く別のことに注意を向けている様子が繰り返し描かれる。そして、それでも彼女はいっこうに気にしていない。

一方、家族が途中で立ち寄る食堂の主人との会話は、お互いがきまり文句ばかりだが、おもに主人が祖母の言葉に相づちを打っている姿が描かれる。彼女に『そりゃあ、あなたが善人だからですよ!』と言われれば、主人は『そうだね。そうなんだろうね』と答える。そしてしばらく後になんの気なしに『善人はなかなかいないもんだ。何もかも悪くなっていくよ』(CS 122) と口にする主人にとって、また同様に祖母にとっても「善人」(“a good man”) はきまり文句の一部にすぎない。ことごとく無視される家族との会話と、ことごとく同意される食堂の主人との会話には、本質的には違いはなく、もしあるとすればその相違は相づちの有無にすぎない。相手にもされないが大して否定もされず、祖母は誰からも干渉されることなく自分が「レディー」であり、物事についてはとりあえず何か「良い」側面を見るようにするような世界に安住している。家族旅行に出かける際にも、「もし自分がハイウェイで事故にあっても、死体を見れば誰にでも一目で (“at once”) 自分がレディーだと分かるように」めかし込み (118)、その日の天候は「ドライブ日より (“a good day for driving”）」(CS 118) で、道端にズボンをはいていない黒

人の子供を見れば、『あそこにかわいらしい黒人の坊やいるじゃない！ (“Look at the cute little pickaninny!”)』とはしゃぎ、平然と『私に絵が描けたら、あれを絵にするのに (“If I could paint, I’d paint that picture”) (CS 119)』と言う。このように、会話も、思考も、視覚も全て紋切り型に依存した祖母の発言は会話にはならず自己完結しているが、祖母がそれを意識することはない。

銃を手にした脱獄犯ミスフィットと遭遇しても、彼女は相変わらずのきまり文句で対処する。『あんた、レディーを撃ったりはしませんよね。 (“You wouldn’t shoot a lady, would you?”)』 (CS 127) と祖母は言う。そしてミスフィットに、あなたは「善人」なのだからとひたすら繰り返すのだ。しかしミスフィットは他の登場人物とは全く異なる。家族の乗った車が転落事故を起こした後、『二回転したのよ！』と言う祖母に対して、『一回転だ』、『おれたちは見てたんだ』 (CS 126) と訂正し、また祖母から『あんたは善人でしょ。わかってるのよ (“I just know you’re a good man”)]、そして『ありふれた出の人なんかじゃないわ！ (“You’re not a bit common!”)』 (CS 128) と泣きつかれても、食堂の主人とは対照的に、『いや、俺は善人じゃない (“Nome, I ain’t a good man”)] (CS 128) と答える。そして「まるでじっくりと祖母の言ったことを吟味するかのよう」にしばらくしてから、『だが、世界一悪人ってわけでもない (“but I ain’t worst in the world neither”)] (CS 128)、と答えるミスフィットは、彼女の言葉を字義通り受け取り、“yes” あるいは“no” と返答することで彼女の砦に侵入し始める。祖母にとって、きまり文句の一つ一つの言葉には意味はない。一方ミスフィットにとっては言葉には字義通り以外の意味はない。それゆえミスフィットは、他の登場人物たちが気にも留めなかった祖母の言葉に繰り返し、律儀なまでに反応するのである。

祖母には紋切り型しか存在しないが、一方ミスフィットには紋切り型が存在しない。二人の言葉遣いにそれはよく表れている。ミスフィットに出会ったときに『あんた、ミスフィットね！ (“You’re The Misfit!)]

『すぐ分かったわ！ (I recognized you at once!)』 (CS 126) と叫んだのははじめとして、『あんたを見ただけで分かるのよ (“just look at you and tell”)』や『あんたは善人でしょ。わかっているのよ (“I just know you’re a good man”)』 (CS 128) のように、“at once”や“just”などと共に断定的な口ぶりで、祖母は「見ただけで（実際には見なくても）わかる」と言い続ける。何もかもを紋切り型で切り取る視線を持つ祖母が何かを見るときには“look”という語が頻繁に用いられ、「見えないことはわからない」と主張するミスフィットが「見る」ことについて言及するときには、『おれたちは見てたんだ (“We seen it happen”)』 (CS 126) に代表されるように、“see”という語が用いられることも対照的である。また祖母が“I know”で始まる台詞を連発するのに対して、ミスフィットが自分の言葉として“know”という表現を使うのは、彼が神の存在をめぐる自らの苦悩を語る長い会話のうちのただ一カ所においてのみである。ミスフィットがしばしば言葉を失い、空を見上げ、森をすかして見ようとするのは、苦悩の中で自らが安住すべき砦を持たない者がどこかにそれを求めようと探す姿のように思われる。そのような二人の会話の特徴を端的に示すのが次のやりとりだ。『空には雲一つないな (“Ain’t a cloud in the sky”)』と、空を見上げてミスフィットが言う。『太陽も見えないが、雲も見えない (“Don’t see no sun but don’t see no cloud neither”)』 (CS127)。すぐさま祖母が言う。『ほんと。いい日よりですよ (“Yes, it’s a beautiful day”)』 (CS 127)。二人の会話全般において、ミスフィットの台詞が祖母の台詞に比べて格段に長いのも、ミスフィットが自らの話のたどり着く場所を、それにあわせて切り取るべき紋切り型を持たないところから話し始め、それに祖母が適当なきまり文句を当てはめていることの一つの表れと考えられる。

祖母の適当なきまり文句は、きまり文句がそれとして認識できないミスフィットにことごとく吟味され、訂正され、祖母が意識していない字義通りの意味を持たされる。これまで誰からも揺るがされることのなかった紋切り型が通用しないことに、祖母も次第に動揺し始める。祖母の言

葉はほとんど“Nome”とミスフィットにうち消され続ける。祖母がそのようなミスフィットに翻弄されていることは、ごくまれにミスフィットに肯定されると、「突然の喜びにふるえ」る祖母の姿に端的に表れる。

「お祈りをすれば」老婦人は言った。「イエス様が助けてくださいますよ」

「その通りだな」ミスフィットは言った。

「それじゃあ、祈ったらいいじゃない」老婦人は突然の喜びにふるえた。

「俺は助けなんかいらないんだ」ミスフィットは言った。「自分で問題なくやってるからな」(CS 130)

しかし、一瞬かみ合ったかのように祖母には思えるやりとりも、実際にはミスフィットによって字義通りに受けとられた、しかしある意味でねじ曲げられた、祖母の意図とは異なるやりとりなのである。例えばミスフィットにキリストについて長い会話をさせるきっかけとなる重要なやりとりを見てみよう。ここではまず、動揺の中できまり文句がこれまでのように思い通りに出てこないという祖母の変化が見られる。

ミスフィットのそばにひとり取り残されて、祖母は自分が声を失っていることに気づいた。空には雲一つなく、太陽もない。彼女を取り巻くのは森のほかは何もなかった。祖母は祈りなさいと言いたかった。何度か口をばくばくとさせて、ようやく言葉が出てきた。ついに出てきた言葉は「イエス様、イエス様」で、イエス様があなたを救ってくれる、というつもりで口にしたのだが、祖母の言い方ではまるで悪態の言葉のように響いた。

「そうだよ」とミスフィットはまるで同意しているかのように言った。「イエスが全ての釣り合いをぶち壊したんだ。イエスも俺も立場は同じなんだが、イエスの方は何の罪も犯してなくて、俺のほうは犯してるってことになってるんだ。俺には判決書があるからな」(CS 131)

「イエス様 (“Jesus”）」という一言はここでは異なる3つの意味を持つ

だろう。一つ目は祖母の意図したきまり文句「イエス様があなたを救ってくれる (“Jesus will help you”）」の、この時点ではまだ祖母のいつものきまり文句のなかの空疎な“Jesus”であり、二つ目は祖母の意図からは切り離されてその場に響いた、「畜生」という悪態としての“Jesus”である。そしてこの「畜生」と響く“Jesus”は三つ目に、ミスフィットの途中で悪態であると同時にすぐさま文字通りキリストとしての“Jesus”へと不意に引き上げられる。そしてこの後、“Jesus”はまさにこれらの意味を併せ持ちながら祖母の信念の揺らぎへの契機となる。

オコナーの作品において、登場人物の信念の揺らぎは、まず視覚の揺らぎとして表れることが多い。⁽⁵⁾ 祖母の動揺も、やはり視覚に表れる。前兆として風景の見え方が変化する。上の段落の引用部分にあるように、ミスフィットと二人きりになると祖母は自分の声が出なくなっていることに気づく。その部分を詳しく見てみよう。「ミスフィットのそばにひとり取り残されて、祖母は自分が声を失っていることに気づいた。空には雲一つなく、太陽もない。彼女を取り巻くのは森のほかは何もなかった。祖母は祈りなさいと言いたかった」(CS 131) という4文のうち、1文目と4文目は祖母の内面に焦点がある。それに挟まれる第2文と第3文は祖母の内面とも語り手が外から眺めている視点とも考えられるが、これらも祖母の視点から語られているとすれば、先ほどまでは祖母にとっては単なる「いい日より (“a beautiful day”）」だった空が、いまやミスフィットの『太陽も見えないが、雲も見えない』という言葉通りの具体的な様相を帯び、そこに行くことは死を意味する森しか自分のまわりがないことを、祖母が見ているであろうことが示される。風景を自在に切り取る紋切り型の視界のフィルターを、祖母は失い始めているのだと考えられるだろう。

しかしそれはまだ決定的な変化ではない。森から二度目の銃声が聞こえてきても、祖母はミスフィットに向かって相変わらずのきまり文句を連発する。“Jesus!” 祖母は叫ぶ。そして、『あんた、血筋がいいのよね！レディーを撃つたりしないでしょ！立派な家系の出なのよね！ (“You’ve

got good blood! I know you wouldn't shoot a lady! I know you come from nice people!』(CS 131-32) ときまり文句を浴びせかける。祖母にとっての世界は、「善人」が「レディー」を撃つわけがないことと同じレベルで、「イエス」は「祈れば助けてくれる」世界なのである。しかしミスフィットはきまり文句を全く解さない異物として彼女の世界に侵入する。もはや次に撃たれるのは自分以外いないことは明らかである。そして何を言っているかわからないまま、祖母は『神は死人を甦らせなかったかもしれない』と呟くと、目眩を感じてその場にへたりこむ (CS 132)。そしてその後、ミスフィットに向かって、『まあ、おまえは私の赤ん坊の一人じゃないか。おまえは私の子供の一人だよ』(CS 132) と口にする場面へと進むのだが、ここで祖母の目の前にある顔は、もちろんミスフィットの顔である。この場面で祖母が見た (“saw”) のは、ミスフィットであってかつ自分の子供である一人の男の顔である。ミスフィットに『あんた、ミスフィットだね!』『すぐに分かったわ』(CS 127) と言うことのできた視界をここでは祖母は持たない。

紋切り型を持たないミスフィットの苦悩は、自らを “The Misfit” と名乗る理由を『犯した罪の合計と受けてきた罰の合計が合わない』(CS 131) ことだと言うように、自分の置かれた状況に自分で説明がつかないことに対する苛立ちから引き起こされたものである。そしてミスフィットが繰り返し「自分が何をやって投獄されていたかわからないが、投獄されたからには悪いことをしたんだ」と述べる時、そこに John Desmond が指摘するように「説明のつかない原罪という重荷」(130) というキリスト教的な意味合いを読み込むことは可能であるだろう。とりわけミスフィットにとっての問題なのは、重荷を背負わされていると感じながらも、それがどのような罪によるものなのかを自らの目で確認できないというところにある。根拠に確信がないままの有責感にミスフィットは、『イエスが言ったとおりのこと (死者を蘇らせたということ) をやったとすれば、俺たちは何もかも投げ出してイエスに従うほかない』と、そしてもしそうでなければ『残されたわずかな時間を、したい放題

やって楽しむしかない』と嘆く。しかしそれは決して確認することのできない問いである。故にミスフィットは『自分はそこにいなかったから、イエスがしなかったとも言えない』(CS 132)と苦しむのである。それは丁度ヨハネによる福音書にある、イエスの復活をその手や脇腹の傷を見て触れるまでは信じられず、イエスから「見ないのに信じる人は、幸いである」という言葉をかけられることになるトマスのようなものである。⁽⁶⁾だがトマスはイエスの傷に触れることができたが、ミスフィットにはそれを確かめる術がない。

そんなミスフィットを前にして、祖母はまず『神は死人を甦らせなかったかもしれない(“Maybe He didn't raise the dead”)』(CS 132)と呟くのだが、この「かもしれない」という躊躇こそ、祖母がそれまで何の気なしに使っていた「祈れば助けてくれるイエス」という紋切り型から外れた不安定なところで思考していることを示す。ここでは祖母は、自分にとって神の問題は問題ですらなかったという自らの“unbelief”に気づいたと考えられる。それと同時に、「神は死人を蘇らせなかった」という仮定は、神の問題を問題とした上で、それを否定しようするという意味で祖母を“disbelief”の状態へ引き上げる。つまりこの瞬間に、祖母は一気にミスフィットの苦悩に肉薄した位置にいるのかもしれない。そしてさらに、『そこにいたら、わかっただろうし、今の自分とは違っていただろうに』(CS 132)と嘆くミスフィットを前に、祖母の頭は「一瞬はつきり」する(CS 132)。そしてミスフィットの泣きそうに歪んだ顔を見て、『まあ、あんたも私の赤ん坊の一人じゃない。私の子供の一人よ!』と手を差しのべながら口にするとき、祖母はなにがしかの神秘の次元に触れているように見えるのだ。ここで祖母は、ミスフィットを置き去りにする形で「不信」の状態から突き抜けてしまったのではないだろうか。そしてミスフィットはここで、不意に神秘の次元に触れているような祖母を確かに見たのではないだろうか。その場で祖母を撃ち殺すという過剰とも思われる反応は、神秘の次元の存在の可能性を目の当たりにしたミスフィットに起きた衝撃の大きさを思わせる。

終わりに

オコナーの短編小説に描かれるのは、登場人物たちが自らの信念の固い砦を打ち破られる瞬間までの物語である。その瞬間には、それまで登場人物たちが頼りにしてきた紋切り型はその効力を無くし、信念の揺らぎが生じる。しかし、その先は描かれていない。例えば「善良な田舎もの」では、義足を奪われたあとのハルガがどうなっていくのかまでは示されていない。あるいは「善人はなかなかいない」は祖母の死で物語が閉じられるため、神秘の次元の出来事が、祖母をどう変えたのか、あるいは変えなかったのかを、きちんと知ることはできない。そして「見ない限り信じない」というミスフィットが、この先どうなるのかも記されていない。短編小説で起きる出来事は、「恩寵の瞬間を受け入れる準備」の初めの段階だと言えるだろう。「善人はなかなかいない」の祖母のように、いくつもの段階を一足飛びに超えていくという例外を除いて、多くの短編の最後に登場人物はハルガのように自らの「不信」の中に取り残される。そしてその先を考えるならば、「不信」に気づいたものは、ミスフィットと同じように、「見ずに信じる」ことは可能かという問題に行き当たらずにはいられないだろう。

この「見ずに信じる」ことは可能かという主題は、ミスフィットと同様に紋切り型を持たない登場人物である『賢い血 (*Wise Blood*)』の主人公 Hazel Motes において展開されている。言い換えればオコナーは長編小説では、ある意味で信念が揺らいだ後の世界を描こうとしているのである。ミスフィットがそうであるように、紋切り型を持たないヘイゼルと他の登場人物との会話は作品の初めから、唐突で、緊迫し、曖昧を許さない。『あなたは、あがなわれたと思っているんでしょう』とヘイゼルは列車の向かい側に乗り合わせた女性に言う。すると、とうとうと自分の家族の話をしている最中であった女性は、もちろん決まり文句で切り返す。『そう、人生はひとつの靈感ですからね』(WB 14)。食堂車で同席した、言葉も交わしていなかった女性たちにもヘイゼルは突然に言う。『もしあなたが、あがなわれたと思っているのなら』『私には必要

ない』(WB 16)。そしてヘイゼルが目映るものを、ほとんど見ていないことが、あるいはたいいていの人が見ているようには見ていないことが、作品のあちこちに示される。例えば作品の舞台となる町 Taulkinham でヘイゼルは、通りを渡っていて警官に呼び止められ、信号機がわからなかったのかと聞かれると「見てませんでした」と答え (WB 45)、そこで出会った Enoch という若者につれられて動物園に入っても「動物を見ず」(WB 94)、Sabath という少女が「でも私の足、白いでしょ？」と彼を誘おうと足を見せつけても、「彼は彼女の足を見なかった」(WB 122) とあるように、ヘイゼルの目はたいいていの人が見るようなものを見ていない。彼はいわばあらかじめ紋切り型を失っているのである。ヘイゼルが紋切り型を持たないのは、自らの「不信」に気づいてしまっているからだ。「不信」の穴埋めを求めて「キリストのいない教会 (The Church Without Christ)」を一人で始め、神の非在を証そうとヘイゼルはもがき苦しむ。『賢い血』は、そのようなヘイゼルの苦悶に満ちた揺らぎの中の、「不信」の中の物語である。作品の終盤で自らの目を石灰で潰して盲目となるヘイゼルは、果たして「見ずに信じる」者になったのであろうか。それについては稿を改めて論じたい。

注

- (1) 引用部分の訳文に関しては基本的には筆者訳だが、オコナーの作品で既訳のあるものについては随時参照した。参照した訳書は以下の通り。『秘義と習俗：フラナリー・オコナー全エッセイ集』上杉明訳；『善人はなかなかいない：フラナリー・オコナー作品集』横山貞子訳；『オコナー短編集』須山静夫訳；『賢い血』須山静夫訳。またページ番号の脇の MM, CS, WB はそれぞれ、以下の書名の略称である。MM: *Mystery and Manners*; CS: *The Complete Stories*; WB: *Wise Blood*.
- (2) 「地の塩 (the salt of the earth)」という表現はマタイによる福音書 5:13 「あなたがたは地の塩である。だが、塩に塩気がなくなれば、その塩は何によって塩味が付けられよう。もはや、何の役にも立たず、外に投げ捨て

- られ、人々に踏みつけられるだけである」(日本聖書教会、新協同訳)という一節に言及したものだと考えられる。
- (3) オコナーの作品の登場人物の唯我論者のなありようについては、例えば以下に言及が見られる。Nisly; Asals126; Marston.
- (4) 「善良な田舎もの」におけるクリーシェの役割については、ティーマンの他に、Carole K. Harris 論考がある。ハリスは特に、ホープウェル夫人とフリーマン夫人の間の会話に着目し、これまでは“empty”あるいは“dead”と見なされてきた二人の紋切り型のやりとりを、コンテキストからとらえ直し、それが「親密さと感情的な力を伝達する」(56) 大切な役割を果たしていることを指摘している。Harris.
- (5) オコナーの作品における視覚の揺らぎの問題に関しては、拙論「フラナリー・オコナーの作品における衝撃的瞬間の考察」をご参照いただきたい。
- (6) ヨハネによる福音書 20:24-29.

参考文献

- Asals, Frederick. *Flannery O'Connor: The Imagination of Extremity*. Athens: University of Georgia Press, 1982.
- Desmond, John. “Flannery O'Connor’s Misfit and the Mystery of Evil.” *Renascence* 56.2 (2004): 128-37.
- Harris, Carole K. “The Echoing Afterlife of Clichés in Flannery O’Connor’s ‘Good Country People.’” *Flannery O’Connor Review* 5 (2007): 56-66.
- 久保, 尚美. 「フラナリー・オコナーの作品における衝撃的瞬間の考察」. *年報地域文化研究* 5 (2001): 104-24.
- Marston, Jane. “Epistemology and the Solipsistic Consciousness in Flannery O’Connor’s ‘Greenleaf.’” *Studies in Short Fiction* 21 (1984): 375-82.
- Nisly, Paul W. “The Prison of Self: Isolation in Flannery O’Connor’s Fiction.” *Studies in Short Fiction* 17 (1980): 49-54.
- O’Connor, Flannery. *Wise Blood*. 1962. New York: Farrar, 1998. (オコナー, フラナリー. 『賢い血』 須山静夫訳. 東京: ちくま文庫, 1999.)
- . *Mystery and Manners: Occasional Prose*. Ed. Sally and Robert Fitzgerald. 1969. New York: Farrar, 2000. (オコナー, フラナリー. 『秘義と習俗: フラナリー・オコナー全エッセイ集』 上杉明訳. 東京: 春秋社, 1999.)
- . *The Complete Stories of Flannery O’Connor*. 1971. New York: Farrar, 1995. (オコナー, フラナリー. 『善人はなかなかいない: フラナリー・オコナー

作品集』横山貞子訳。東京：筑摩書房，1998；オコナー，フラナリー。
『オコナー短編集』須山静夫訳。東京：新潮文庫，1974。）

サルトル，ジャン＝ポール。『実存主義とは何か：実存主義はヒューマニズムである』。京都：人文書院，1955。

Thiemann, Fred R. “Usurping the Logos: Clichés in O’Connor’s ‘Good Country People.’” *Flannery O’Connor Bulletin* 24 (1995-96): 46-66.